CONTENTS

目次

I章　近代考古学への道 …… 1
II章　郷土史研究とその人々―人物・ネットワーク …… 6
III章　保護するものへ―文化財保護体制の整備 …… 11
IV章　地域を見据える文化財保護 …… 16
V章　くらしを伝えるために―民俗伝承への取り組み …… 20

特別対談「近藤義雄・梅澤重昭が回顧する―群馬県の文化財に生きた人々」
近藤義雄（前かみつけの里博物館館長）・梅澤重昭（文群馬大学教授） …… 21

群馬県内の埋蔵文化財関係の主な出来事 …… 65
出品資料一覧表 …… 66
協力者・協力機関 …… 67
あとがき …… 67

I 近代考古学への道

『古墳図説』（明治十年刊）（群馬県立歴史博物館蔵）

『考古雑記』

者たちとは、「遺跡・遺物・遺物から過去の人間活動とその時代などの環境に関する情報を抽出、収集し、それによって歴史の再構築を試みる学問分野」である。

出発点

江戸時代、国内では歴史学の一端として遺跡・遺物の調査が行われていた。元禄五（一六九二）年、徳川光圀が行った上野国・下野国・陸奥国・出羽国の調査は、遺跡保護を目的とする調査とされる。江戸中期になると、国学・古物学などを、古物に対する関心が向けられた。「好事家」（こと）と呼ばれる人たちは、主に石器や鏡などを収集していた。江戸後期の国学者・谷川士清は、「文献の裏付けを考慮した出土遺物」を重んじた。「出土地名辞典」という用語は、このなかで初めて使われた。

今から三〇年前、明治一〇（一八七七）年、アメリカ人動物学者E・S・モースは、横浜から東京へ向かう汽車の車窓で、大森貝塚を発見する。これが国内における科学的考古学の出発点となった。

上野国（群馬県）における研究の先駆け

『勢多郡誌』（明治二四年）の関根郡は、「領内の遺跡や遺物の見聞録を『古墳図説』に著し、『発掘』では、寛政四（一七九二）年、文政（一八一八）年の調査」を記した。

吉田東伍は、上毛新聞中頃の出田信義入って、歴史に興味を持ち、上毛新聞の記事を書いたり、このなかで、郷土古墳群内の横穴式石室を詳細に観察し、愛宕山古墳・宝塔山古墳・横穴式石室の墓室構造を推定した。

このほか、文政二（一八一九）年に書かれた『新田郡山名村絵図』には、今の新田八幡山古墳・太田市・玉の横穴式石室にはめこまれた「家形石棺」の発見が「宮乃沢」の御山林内で、石の棺蓋を掘り出したという絵図として残る。

『新田郡山名村絵図説明書』（部分）

宝塔山古墳出土遺物（太田市教育委員会蔵）

今宮口八幡山古墳出土横穴式石室と家形石棺（太田市教育委員会蔵）

宝塔山古墳出土金環類

注
一　『日本考古学事典』（昭和五六年）
二　古墳時代の墓制の一つとして、横穴式石室の内部に、ちょうどいい棺を置き、石室奥に向かって頭を置くように、死者を埋葬した。棺蓋を開けたままにしておくことが多い。
三　ものすごいの意。「ものすごい」の語源は、「ものすごい」の意。
四　上野（こうず）・群馬県の旧国名。
五　太田市・太田市の東部を含む地域。
六　太田市・太田市の西部を含む地域。

アーネスト・サトウ（横浜開港資料館蔵）

『日本考古学事典』（昭和五六年）（三省堂）

群馬県を訪れた外国人研究者

前橋出身説に伝聞する大室古墳群は、今から二二九年前の明治二八（一八九五）年、地元の人たちにより、横穴式石室が発見されている。その二年後の明治三一（一八九八）年、イギリス人外交官アーネスト・サトウが古墳を訪れ、発見された品々を見学する調査を実施、「日本アジア協会紀要」に「上野地方の古墳群」として発表される。その研究は、石室石材や埋葬された人物の装飾にも及ぶ。

「日本考古学の父」と呼ばれる、ウィリアム・ゴーランドは明治政府が大阪造幣寮に招聘したイギリス人科学者。造幣寮時代、明治五（一八七二）年から二年間、滞在した。その間、梅澤重昭の古墳四〇基を調査し、四〇〇〇の埴輪図を作成した。群馬県では大室古墳群や鎧塚山古墳を訪れ、その研究成果は、イギリス帰国後の明治四（一八九〇）年に発表した「日本の埋葬大室墳」とされる。「日本の埋葬大室墳」では、彼の科学的・実証的な調査研究は、高い水準をもって行われ、近代考古学の歩みの先駆けとなった。

このほか、群馬県内では、明治一七（一八八四）年に東京大学人類学教室に在籍した人類学・考古学者の坪井正五郎が、北山茶臼山古墳・宮岡山古墳・宮岡山古墳を調査している。